

も く じ

ごあいさつ	中国地区会会長 佐藤 園	1
第36回日本家庭科教育学会中国地区会「役員会」(総会)報告		2
研究発表要旨		5
研究室だより	岡山大学大学院教育学研究科 河田 哲典	19
学校現場から	鳥取市立湖東中学校 西垣 充子	20
学校現場から	島根大学教育学部附属小学校 竹吉 昭人	22
日本家庭科教育学会本部だより	中国地区会代表者 西 敦子	23
2017年度「研究発表会および講演会のご案内」	福山平成大学 中村 喜久栄	24
事務局だより	岡山大学 篠原 陽子	25

ごあいさつ

中国地区会会長 佐藤 園 (岡山大学教育学部)

この2月14日に、文部科学省は次期学習指導要領案を公開し、3月15日までパブリックコメントを募集しました。次期学習指導要領案をみると、2030年を見据え、子どもがこれから生きる予測できない未来に対応するための学校教育の方向性が示されています。そこでは、子どもが地球規模の問題にも関わり、持続可能な社会づくりを担うような力を育成する場として学校が意義づけられています。子どもがこれらの力を身に付けるためには、より科学的な知識(概念・理論)・技術の獲得と「それらを用いてどのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という知識・技術の活用により、自ら考え、判断し、表現する力の育成が必要とされています。そのためには「社会に開かれた教育課程」の構築および「カリキュラム・マネジメント」と「アクティブ・ラーニング」を連動させた学校経営の展開が不可欠であると述べられています。

中国地区会では、この学校教育の方向性を踏まえ、2015年度から共同研究「アクティブラーニングを活かした家庭科の授業開発」に取り組んで参りました。現在は、共同研究担当の丸橋先生(島根大学)を中心にその成果がまとめられ、6月には教育図書から出版の予定になっています。

本地区会は、1981年8月に第1回研究発表会・総会・講演会を実施し、発足しました。発足当初から「地区として特色ある共同研究をすること」が話し合われ、1985年8月に開催された第5回地区会において、独自の共同研究を行うことが決定されました。それ以降、3年間を期間とする共同研究を進め、その成果を報告書や書籍としてまとめ、全国の家庭科教育関係者に発信し続けてきました。

今年は、日本家庭科教育学会が発足し、60年になります。6月24日・25日には、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、日本家庭科教育学会第60回大会が開催されます。60周年記念大会ということで、本部より地区会に功労賞推薦の依頼がありました。中国地区会からは、本地区会の発足や共同研究の立ち上げ等にご尽力頂きました田結庄順子先生を推薦させて頂くことができました。

第60回大会では、本地区会で出版する「アクティブラーニングを活かした家庭科の授業開発」を販売し、全国に新しい家庭科の授業実践を発信したいと考えております。共同研究に参加して頂いた先生方、是非、6月の全国大会、そして8月の地区会におきまして、先生方の研究の成果を口頭やポスター等の研究発表を通じて全国や中国地区の家庭科教育関係者の皆様に発信して頂ければと思います。

第 36 回日本家庭科教育学会中国地区会「役員会」（総会）報告

平成28年度の日本家庭科教育学会中国地区会の研究発表および講演会は、平成28年8月20日に、鳥取大学教育学部において開催された。

総会次第

- | | |
|---|--|
| <p>1 開会の辞 福田 恵子</p> <p>2 会長挨拶 西 敦子</p> <p>3 会場校挨拶 福田 恵子</p> <p>4 議長選出 中村喜久江</p> <p>5 議事</p> <p>(1) 報告事項</p> <p>①平成 27 年度庶務報告 篠原 陽子</p> <p>②平成 27 年度会計報告 篠原 陽子</p> <p>③平成 27 年度会計監査報告 中村喜久江・丸橋静香</p> | <p>(2) 協議事項</p> <p>①役員改選及び新体制について 中村喜久江</p> <p>②平成 28 年度事業計画 篠原 陽子</p> <p>③平成 28 年度会計予算 篠原 陽子</p> <p>④共同研究について 丸橋 静香</p> <p>⑤ その他 西 敦子</p> <p>6 次期会場校（福山平成大学）挨拶 中村喜久江</p> <p>7 閉会の辞 福田 恵子</p> |
|---|--|

[報告事項]

1. 平成 27 年度 庶務報告

① 地区会現況報告（平成 27 年 8 月末日現在）

鳥取県 5 名，広島県 50 名，岡山県 10 名，島根県 24 名，山口県 14 名，計 103 名
(平成 26 年 8 月末日 109 名)

② 平成 27 年度事業報告（平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月）

平成 27 年 8 月 役員会・総会ならびに中国地区会第 35 回研究発表会・講演会開催(山口大学)
平成 28 年 1 月 末 共同研究募集
平成 28 年 3 月 会報 36 号発行

2. 平成 27 年度 会計報告

*一般会計（自：平成 27 年 4 月 1 日～至：平成 28 年 3 月 31 日）

<収入の部> (単位 円)

費 目	予算額	決算額	摘 要
前年度繰越金	104,321	104,321	
地区会費	109,000	116,000	1,000 円× 116 人分
本部からの交付金	56,910	56,910	
教大協からの補助金	30,000	40,000	
報告書売上金	0	17,000	日本家庭科教育学会第 58 回大会
雑収入	40	31	預金利息
合計	300,271	334,262	

<支出の部> (単位 円)

費 目	予算額	決算額	摘 要
総会費	100,000	100,000	
通信費	20,000	3,228	
事務用品費	5,000	1,000	
会議費	10,000	7,050	
印刷費	10,000	0	
雑費	1000	0	
共同研究費(特別会計)	50,000	0	
予備費	104,271	0	
合計	300,271	111,278	

<次年度繰越金> 222,984 円

***特別会計（自：平成27年4月1日～至：平成28年3月31日）**

＜収入の部＞

（単位 円）

事項	予算額	決算額	備考
前年度繰越金	791,887	791,887	
一般会計から繰入	50,000	0	
共同研究報告書売上金	20,000	2,519	印税 2,519 円 21 冊（教育図書）
利子	90	123	
計	861,977	794,529	

＜支出の部＞

（単位：円）

事項	予算額	決算額	備考
通信費	10,000	11,902	
予備費	851,977	0	
計	861,977	11,902	

＜次年度繰越金＞ 782,627 円

3. 平成27年度 会計監査報告

平成27年度の会計について、領収書、帳簿を照合して監査した結果、適正に処理されておりましたので、報告いたします。

平成28年8月20日

会計監査：中村喜久江・丸橋 静香

【協議事項】

1. 役員改選および新体制について

(1) 平成27・28年度の役員選出結果

- ・広島県 中村喜久江（福山平成大学）
- ・山口県 西 敦子（山口大学）
- ・鳥取県 福田恵子（鳥取大学）
- ・島根県 丸橋静香（島根大学）
- ・岡山県 佐藤 園（岡山大学）

(2) 役割分担（平成27年8月～平成29年7月）

役 職	所 属	氏 名
地区会長	岡山大学	佐藤 園
地区副会長	山口大学（※）	西 敦子（※）
	鳥取大学	福田 恵子
会計監査	島根大学	丸橋 静香
	福山平成大学	中村 喜久江
庶務・会計	岡山大学	篠原 陽子

（※は地区会代表者）

2. 平成28年度事業計画（案）（自：平成28年4月1日～至：平成29年3月31日）

平成28年7月 日本家庭科教育学会中国地区会第36回研究発表会並びに総会案内送付（鳥取大学）

平成28年8月 役員会開催（鳥取大学）

平成28年8月 日本家庭科教育学会中国地区会第36回研究発表会並びに総会（鳥取大学）

平成28年12月 共同研究原稿締切

平成29年3月 会報第37号発行

3. 平成 28 年度会計 予算 (案)

* 一般会計 (自 : 平成 28 年 4 月 1 日 ~ 至 : 平成 29 年 3 月 31 日)

< 収入の部 >

(単位 円)

費 目	27 年度決算額	予算	摘 要
前年度繰越金	104,321	222,984	
地区会費	116,000	103,000	1,000 円×103 人分
本部からの交付金	56,910	56,910	
教大協からの補助金	40,000	35,000	
報告書売上金	17,000	10,000	
雑収入	31	40	預金利息
合計	334,262	427,934	

< 支出の部 >

(単位 円)

費 目	27 年度決算額	予算額	摘 要
総会費	100,000	100,000	
通信費	3,228	20,000	
事務用品費	1,000	5,000	
会議費	7,050	10,000	
印刷費	0	30,000	会報 37 号
雑費	0	1,000	
共同研究費 (特別会計)	0	0	
予備費	0	261,934	
計	111,278	427,934	

* 特別会計 (自 : 平成 28 年 4 月 1 日 ~ 至 : 平成 29 年 3 月 31 日)

< 収入の部 >

(単位 円)

事項	27 年度決算額	予算	備考
前年度繰越金	791,887	782,627	
共同研究費として一般会計から繰入	0	0	
共同研究報告書売上金	2,519	20,000	※次年度は計上しない 0 とする
利子	123	125	
計	794,529	802,752	

< 支出の部 >

(単位 円)

事 項	27 年度決算額	予算額	摘 要
通信費	11,902	10,000	
予備費	0	792,752	
計	11,902	802,752	

日本家庭科教育学会 中国地区会

第36回研究発表会・講演会

発表要旨

期 日 平成27年8月22日(土)
場 所 山口大学教育学部 11番教室

研究発表プログラム

12:45~13:45

1. 批判的思考を育成する小学校家庭科の授業開発

—「買い物学習」の実践をとおして—

島根大学 丸橋 静香
島根大学教育学部附属小学校 竹吉 昭人
島根大学4回生 名和川 祐佳
浜田市立雲城小学校 道中 汐梨

2. 中学生の生活意識とユニバーサルデザインに対する知識・意識についての

—考察 —共生・人の多様性に着目して—

広島都市学園大学 富田 道子
大阪成蹊短期大学 松岡依里子

3. 子どもの視点から見る家庭教育が子どもに与える影響

—日中韓の比較のための試み—

岡山大学大学院教育学研究科 M1 キョ チンニ
岡山大学大学院教育学研究科 李 環媛

4. 「住生活」領域学習への意欲を育む家庭科授業の構成

宇部フロンティア大学附属香川高等学校 町田万里子

基調講演

14:00~15:40

演 題 ディープ・アクティブラーニングの提案

講 師 松下佳代 氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

実践報告

15:10~15:25

「身近なバックを非常持ち出しバッグに変身させるアイデアを考えよう」

報告 西垣充子 氏（鳥取市湖東中学校）

ディスカッション

15:25~15:40

批判的思考を育成する小学校家庭科の授業開発

——「買い物学習」の実践をとおして——

○島根大学 丸橋静香, 島根大学教育学部附属小学校 竹吉昭人
島根大学4回生 名和川祐佳, 浜田市立雲城小学校 道中汐梨

1 批判的思考の育成の必要性

本発表では、家庭科において近年注目されている批判的思考を育成する授業構想を「買い物学習」を例に提案する。批判的思考とは、論者によって多様な概念があるが、大きくは①メタ認知、②懐疑的思考へ態勢の二つに分けられる。本発表では、①メタ認知の方に焦点を当てる。メタ認知とは、自身の認知をより高次なところから評価する認知と言える。そうであれば、批判的思考育成の一課題として、児童・生徒の認知を一段高いところに引き上げることが必要になる。

2 「買い物学習」におけるメタ認知

本発表では、「買い物学習」における「より高次の認知」を考えるに当たり、社会認識発達の研究を参照した。それによれば、10歳前後を境に、可視的なあるものとあるものを単純に結びつける具体的な場面思考から、より抽象的な概念によって包括的に物事を考えることができるようになる。そこで本研究では、この研究から、またさらに児童へのインタビューを基に、「買い物」における視点・観点も、値段・量といった目に見えやすいものから、産地、(家族の)健康、(社会全体の)環境/福祉へと抽象化・高次化すると考えた。こうした認知の高次化を促すことで、批判的思考が可能になり、普段の買い物の方略を評価し、より良いものにすることができる。

3 「買い物学習」での批判的思考育成の授業構想——「めざせ買い物名人」——

こうした理論枠組みを基に、「めざせ買い物名人」をテーマに、次のような買い物授業を構想し、実践した(2016年7月島根県内小学校6年生1学級)。学習前、児童の買い物の観点は、「値段」「計画的に使う」といったことがほとんどであった。そのため、7月初旬の消費領域の授業では、①買い物の際の観点を増やし、その上で②複数の観点を結びつけて(認知の高次化をして)、買い物に向かう態勢を育成することを目的とした。

まず買い物の観点を増やすために、カレーの材料を購入するという設定で、実際にカレールー、牛肉、じゃがいもの実物をそれぞれ二種類教室に置き、見て回らせ、どちらを購入するかを決めさせ、その理由をワークシートに書き入れさせた。その後、個人で挙げた買い物の観点・理由を班で出し合った。さらに、それを学級全体で出し合い、共有した。そして、最後に、「買い物名人のコツ」として、「買い物するとき〇〇を見るべし」の「〇〇」を考えさせる活動を行わせ、その理由も含め自由記述で記入させた(値段を除いて記入させた)。

4 結果・考察

①買い物の観点を増やすという点については、学級全体の活動で15観点まで増えた(有名/宣伝、パッケージ、健康、味、品質、値段、形、大きさ、鮮度、産地、見た目、安心/安全、期限、量、色)。②複数の観点を結びつけ、核となる観点1ないし2を含み、平均が3.55観点となり、買い物上の観点が多少ではあるが複雑化した(児童29名)。

文献

加藤寿朗『子どもの社会認識の発達と形成と形成に関する実証的研究』風間書房、2007年。
楠見孝『批判的思考』有斐閣、2015年。
道中汐梨『小学校家庭科の買い物学習に関する研究』(島根大学教育学部卒業論文)2016年、未刊行。

中学生の生活意識とユニバーサルデザインに対する知識・意識についての一考察

—共生・人の多様性に着目して—

○富田道子（広島都市学園大学）
松岡依里子（大阪成蹊短期大学）

【目的】

1995年以降、国際社会において個々人の多様性を理解し尊重する意識の高まりのなか、共生の視点が強く求められている。日本においても2000年以降、人権に関わる条約や法律が寄託・施行された。加えて、超少子高齢社会を背景に人との関わりやさまざまなシステムの再構築が求められ、「ユニバーサルデザイン（以下、UDとする）」の考えは現行の中学校技術・家庭科教科書に反映されている。

現行の中学校学習指導要領も社会の変化に対応し、学習指導要領解説の技術・家庭編（平成20年7月）の「第3節 家庭分野 1 家庭分野の目標」のなかに、「持続可能な社会における生活の営みへの足掛かりとなる能力と態度を育てる」の文言が盛り込まれている。UDのベースとなる価値観、すなわち人の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等は、持続可能な開発のための教育（ESD）の「育みたい力」と重なることから、UDをすべての人が主体的で持続可能な生活を営めるためのキーワードと位置づけ、中学生を対象に生活意識調査、「共生・人の多様性」理解を深めるUD授業、授業前後にUD知識・意識調査を行った。

ここでは、生活意識調査、UD知識・意識調査（事前調査）結果を明らかにする。

【方法】

都内の女子中学3年生246名を対象に、平成27年10月13日～19日に質問紙によるクラス単位の集合調査を行った。調査項目は、「生活意識」30項目、「UD知識」12項目、「UD意識」14項目で、単純集計、因子分析を行った（SPSS統計解析ソフト Ver. 18 使用）。

【結果】

女子中学生の生活意識について、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を用いて分析した結果、固有値1以上で3因子が抽出された。第1因子は「親以外に気軽に相談できる大人がいる」「親以外に尊敬できる大人がいる」などの信頼因子、第2因子は「親からよくほめられた」「親は私のことをよくわかっている」などの自己肯定因子、第3因子は「私たちは個人生活の充実をもっと重視すべきである」「私たちは社会のことにもっと目を向けるべきである」などの社会意識因子である。これらの結果から、自立に向かう成長過程にある女子中学生は、親や友人などとの関係性のなかで、「私は私」「今の自分で大丈夫」という確かな感覚を持ち、社会意識が育ちつつあることがみえてきた。

UD知識については、「UDについて今まで学習したことがある」が77.6%、「UDという言葉を知っている」が71.5%と7～8割近くの生徒が回答するものの、「UDとBF（バリアフリー）の違いを説明できる」が37.8%、「『人の多様性』と『多様な人々』の違いを説明できる」が25.2%と、言葉・概念の違いを説明できると回答した生徒は約3割であった。

UD意識については、「UDについていつも気にかけている」が15.0%、「日常生活のなかにUDの考え方やUD製品が浸透していると思う」が43.9%など、生徒はUDをいつも心に留めているわけではない。しかしながら「毎日使う道具、利用する施設設備が適切なデザインであれば、私たちの生活の質は向上する」（81.7%）や、「誰もが暮らしやすい社会にするために、私にもできることがある」（78.9%）の意識は高いことがわかった。

女子中学生は、よりよい生活を営みたいという気持ちや、自己の成長・可能性に前向きな気持ちを持っており、これら結果と生活意識とが潜在的に結びついていることがわかった。以上のことから、中学生という感受性の豊かな時期にUD授業をすることの意義が示唆された。

子どもの視点から見る家庭教育が子どもに与える影響

—日中韓の比較のための試み—

○キョ チンニ, 李 璟媛
岡山大学大学院教育学研究科

1. 研究目的

平成 18 年に施行された教育基本法の第二章第十条には、「家庭教育」と題して、「父母その他の保護者は、この教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身につけさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」、「国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない」と規定されており、「家庭教育」の重要性が指摘されている。本研究では、家庭教育を「親または家族の年長者による子女に対する意図的なしつけ、訓練、また、子女が自然に身につける場合のように無意図的な人間形成のために行う教育行為」ととらえる。

本研究では、子ども期を経験した青年期の大学生は、どのような家庭教育を受けてきているのか、家庭教育の必要性についてどのように考えているのか、自分自身についてどのように認識しているのか、などを把握するとともに、家庭教育が子どもに与える影響を分析することを目的としている。現在、家庭の教育力が低下しているという指摘を受けている日本、中国、韓国の大学生を調査対象にし、3 か国の大学生の意識を比較しながら、家庭教育が子どもに与える影響を探ってみたいと考えている。今回は、第一段階の作業として、日本で行った予備調査で得られた結果に基づいて報告する。

2. 調査方法

本研究は質問紙による調査方法に基づいて、2016 年 7 月に岡山市の 4 つの大学で予備調査を行った。337 部配布し、284 部回収（有効回収率 84.3%）した。今後、引きつづき、日本、中国、韓国の大学生を対象に本調査を行う予定である。

3. 調査結果

（1）調査対象者の属性

性別では、男性が 19.4%、女性が 80.6%であった。小学校時期の家族形態では、核家族が 71.0%、父方拡大家族が 20.8%、母方拡大家族が 8.1%であった。

（2）自分についての認識

「今の自分が好きだ」など 20 項目を設定し、質問した結果、8 割以上の人が肯定的に認識した項目は、「善悪が区別できる」、「人の意見を尊重する」、「人と協力できる」、「自分の過ちを認める」、「感謝の気持ちを言える」、「謝罪の気持ちを言える」の 6 項目であった。また、「今の自分が好きだ」と答えた大学生は、55.3%であった。一方で、「自信がない」と答えた人が 7 割を超えていた。

（3）家庭で教えることと学校で教えること

本調査では「人に挨拶すること」などを含む 23 項目を設定し、家庭と学校のどちらで教える方がいいのかを質問した。「家庭で教える方が良い」が最も多かった項目は、「人の家に訪問した時の礼儀」と「無駄遣いしないこと」の 2 項目、「学校と家庭の両方で教える方が良い」が最も多かった項目は、「人に挨拶をすること」、「約束を守ること」、「人に迷惑をかけないこと」など 20 項目であった。

（4）本人はどこで教えてもらったか

同じく 23 項目について、本人はどこで教えてもらったかを質問した。「家庭で教えてもらった」が最も多かった項目は「人に挨拶をすること」など 6 項目、「学校と家庭の両方で教えてもらった」が最も多かった項目は「交通ルールを守ること」など 16 項目であった。

（5）将来の自分の子どもの教育についての考え

将来、自分が子どもを持った場合、自分が受けた家庭教育を子どもにも同じく与えたいと答えた人は 7 割を超えており、その理由は「自分が受けた家庭教育が良かったと思うから」であった。一方、3 割の人は「自分が受けた家庭教育は不十分だから」、または「自分が経験した理不尽なことを自分の子どもに与えたくないから」などの理由で否定していた。

自分が受けた家庭教育を子どもに同じく与えたいと答えた人は、そう答えなかった人に比べて、自分のことを「人の気持ちを理解できる」、「善悪が区別できる」、「人と協力できる」、「感謝の気持ちを言える」、「人から信頼される」な人だと認識している傾向が見られた。今後は、引きつづき家庭教育が子どもに与える影響について分析したい。

「住生活」領域学習への意欲を育む家庭科授業の構成

宇部フロンティア大学付属香川高等学校 町田万里子

I 研究の背景と目的

我が国では古来から地震や津波、土砂災害による被害が相次いでいるが、近年では天災だけでなく人災による被害も多発している。例えば新建材によるシックハウス症候群の問題や、安値競争を背景にした部材削減による住宅の質の低下等である。しかしその一方で住み手の意識そのものの低下を問題視する声もある。例えば日本の住居の平均寿命は欧米諸国と比較してかなり数値が低い、これは消費者が日本の気候風土の特徴を理解せず日頃の手入りを怠ったり、言われるがまま購入してしまったりする事にも原因があるという。また住居の最も重要な機能はシェルターとしての機能であるが、ある住宅メーカーによると、現在は有名なメーカーであるかどうかや外観の美しさが住居選択の最重要基準になりつつあるという。これらの事例は現代人の住居への関心の低さを表しているとともに、ライフスタイルや価値観の多様化により家本来の機能が見えにくくなっている現状をも示唆している。生徒への事前調査でも住生活への関心の低さが浮き彫りになったため、まずは本領域への学習意欲を高める効果的な指導内容や方法を検討することを目的とし、研究に取り組むこととした。

今回は計 11 時間実施のうち 6 時間目までの授業内容と、生徒の意欲の変化について報告する。

II 研究方法

1. 対象…山口県宇部市の高校 1 年生、普通科特進コース 1 学級 39 名
2. 時期と授業時数…平成 28 年 6 月～9 月にかけての 11 時間（現在 6 時間目まで終了）。
3. 方法…
 - (1) 事前調査：①家庭科のどの領域に最も興味があるか、②住生活領域に対する興味関心の度合い（五件法）、③住生活で今後学びたいこと等についてアンケート調査を行った。
 - (2) 授業実施：アンケートで得た情報から生徒の興味関心に沿う授業づくりを心掛け指導計画を立案した。教科書は実教出版「家庭基礎」を使用した。
 - (3) 授業後調査：住生活領域に対する興味関心の度合いについて改めてアンケート調査（五件法）を行い、意欲の変化について検証した。

III 結果と考察

事前調査の結果、①最も興味のある領域は「食生活（37%）」であり「住生活」は 13%にとどまった。②住生活への興味は「非常にある」が 11%、「あまりない・ない」が 24%であった。また③今後住生活で学びたい事については「間取り」「家具の配置」「建材について」等一人暮らしや将来家を購入する事を見通しての解答が 26%と多かった。この他「日本の住文化」「世界の家」「地震対策」等の回答がみられた。しかし最も多かった解答は「特になし」45%であり住生活領域への関心の低さが窺えた。次に調査結果をもとに授業を計画立案し実践した。まず導入では問題提起を行った。現在ファスト・ファッションが流行しているがその兆候が住居選択にも表れていることに気付かせ、家本来の機能とは何かを考えさせた。次に事前調査で関心の高かった日本の住文化について掘り下げた。日本人の美意識や価値観、他国との違い、気候風土にあった材質や住まい方について考えさせ、日本文化への誇りがもてるよう工夫した。さらに住居に使用する建材や色彩が人体や心理面にどのような影響を及ぼすかについて授業を行い、その後一人暮らしをテーマにカラーコーディネートの練習を行った。その結果授業後の調査では住生活への興味が「非常にある」は 13%と微増であったが、「あまりない・ない」が 8%に減少し、その生徒達も感想には「授業は楽しかった」と回答していた。また興味が「ある」と回答した生徒からは、「努力して早くわかるようになりたい」「興味がさらに高まった」「自立に向けての準備ができると思う」等の感想を得られた。事前調査を活かし、生徒の興味に沿う教材、学習構成を吟味したことにより、意欲を少しずつ引き出ししていくことができたのだと考える。

<講演 PowerPoint>

演 題 ディープ・アクティブラーニングの提案

講 師 松下佳代 氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

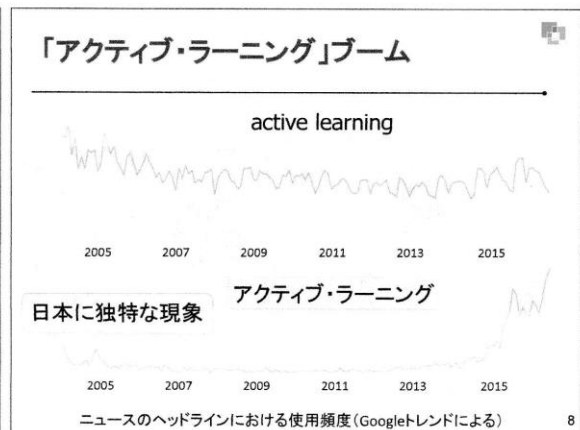
<p>日本家庭科教育学会中国地区会 第36回研究発表会・講演会・総会</p> <p>2016.8.20@鳥取大学地域学部</p> <p>ディープ・アクティブラーニングの提案</p> <p>松下 佳代 京都大学・高等教育研究開発推進センター matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp</p>	<p>OUTLINE</p> <ul style="list-style-type: none">● 中学校時代の経験から● アクティブ・ラーニングの背景● ディープ・アクティブラーニングとは● ディープ・アクティブラーニングのデザイン● ディープ・アクティブラーニングの実践 <p>2</p>
---	--

<p>中学校時代の経験から</p> <p>3</p>	<p>国語の授業での学び</p> <ul style="list-style-type: none">● K先生の授業<ul style="list-style-type: none">● 1学年4学級の学校。3年間国語を担当● 授業方法<ul style="list-style-type: none">● すべて班学習(班・核・討議づくり)● 授業外:先生の自作プリントで、事前学習(個別)● 授業:さらに発展的な問いを、班→クラス全体でディスカッション● 印象的な授業の数々<ul style="list-style-type: none">● 批判読み(原子力の有効活用についての説明文で)● 「走れメロス」 <p>4</p>
-----------------------------------	---

<p>「走れメロス」</p> <p>ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。 「メロス、君は、まっばだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」 勇者は、ひどく赤面した。</p> <p>5</p>	<ul style="list-style-type: none">● 授業を通して学んだこと<ul style="list-style-type: none">● 一つのテキストに多様な解釈がありうること● 自分で価値判断を下してよいこと● 浅い読みから深い読みへ読みを深めることができること● こうしたことは、一人ではなく、教師や班・クラスのメンバーとのインタラクションを通じて可能になること● 「点数で測られる学力」の向上<ul style="list-style-type: none">● 学習成果のほんの一端● 私の「ディープ・アクティブラーニング」の原点 <p>6</p>
--	--

アクティブ・ラーニングの背景

7



アクティブ・ラーニング普及の背景

- 教授 (teaching) から学習 (learning) への焦点の移動
 - 教員が「何を教えた」か
 - 学生が「何を知り、できるようになった」か
- ユニバーサル化
 - 学力・意欲の多様化 → 講義だけでは90分の授業が成立しない
- ネット時代における学習空間としての価値の問い直し
 - 対面で他の人々と共に学ぶことの意味

(特に日本の場合)

- 「資質・能力」を育成する方法としての政策的な推進

9

ブームの背景にある教育政策

- 【1】 小学校～大学の「一体的な改革」
 - 質的転換答申 (2012.8) : 大学
 - 次期学習指導要領への諮問 (2014.11) : 小～高
 - 高大接続改革答申 (2014.12) : 高校-大学入試-大学
- 【2】 目標-内容-方法-評価の整合性 (alignment)
 - 目標: 「資質・能力」「学力の3要素」/ディプロマ・ポリシー
 - 内容: 教科・科目等の再編・新設 /カリキュラム・ポリシー
 - 方法: 「アクティブ・ラーニング」
 - 評価: 「大学入試改革」「パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価」/アセスメント・ポリシー
 - カリキュラム・マネジメント: 「PDCAサイクル」

10

● 【目標】 資質・能力、学力の3要素

<p>学力の3要素 (学校教育法, 2007)</p> <p>①「基礎的な知識及び技能」</p> <p>②「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」</p> <p>③「主体的に学習に取り組む態度」</p>	<p>学力の3要素 (v2) (高大接続改革答申, 2014)</p> <p>(i) 主体性・多様性・協働性</p> <p>(ii) 「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」</p> <p>(iii) 「知識・技能」</p>	<p>学力の3要素 (v3) (次期学習指導要領に向けた審議のまとめ, 2016)</p> <p>①知識・技能</p> <p>②思考力・判断力・表現力等</p> <p>③学びに向かう力・人間性</p>
---	--	--

- 【方法】 アクティブ・ラーニング
 - 「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」(質的転換答申)
 - 「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」(次期指導要領諮問、論点整理)
 - 「主体的・対話的で深い学び」(審議のまとめ)

11

背後にある社会の変化

- 現代という社会
(ポスト近代社会、後期近代社会)
 - グローバル化、情報化、流動化
 - VUCA
- 未来の創り手となるために
必要な資質・能力の育成

12

なぜ、ディープ・アクティブラーニングなのか

●「アクティブ・ラーニング」への違和感

- 大学教育から
- 「学生の能動的な参加を取り入れた教授・学習法の総称」として
- グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションなどの授業形態に注目
- 質の高い学習は「アクティブ・ラーニング」だけではない！

●「ディープ・ラーニング」に注目

- アクティブ・ラーニング：学習形態に焦点
- ディープ・ラーニング：学習の質や内容に焦点

ディープ・アクティブラーニング

19

「ディープ・アクティブラーニング」の考え方

アクティブであると同時に
ディープでもあること

アクティブ・ラーニング ディープ・ラーニング

(方法) (内容)

* ディープ・ラーニングの特徴

- 概念を既存の知識や経験に関連づける
- 共通するパターンや根底にある原理を探す
- 証拠をチェックし、結論と関係づける
- 論理と議論を、周到かつ批判的に吟味する

(Entwistle, 2009)

20

外的活動だけでなく、
内的活動でもアクティブ
であること



* 「能動的に聴く」ことの重要性

- 人の話に聞き入れることができない生徒

“眠った”状態の生徒

↑
アクティブな外的活動によって頭や体をほぐす

21

外的なアクティブと内的なアクティブ

- 外から見て能動的に活動しているような学習状態を「外的なアクティブ」と呼ぶならば、その逆もある。静かに本を読んでいるだけとか、教師の話を受けているだけに見えるが、頭の中は積極的に動いているときである。課題意識をもち、知識を関連付けたり、批判的・創造的に考えたりしている場合だ。このように、まさに主体的に自己内対話をしている状態は「内的なアクティブ」とも言えよう。
- 私たちが目指すのは、思考の活性化された内的なアクティブ状態のはずだ。とはいえ、インプット活動だけの学習形態では、なかなかそうはならないことが多いのではないだろうか。
- そこで、アウトプット活動やそれに対する他者からのフィードバックを入れる(すなわち対話すること)により、その外的にアクティブな学習形態が刺激となって、内的なアクティブ状態が促されるようにしたい。これがアクティブ・ラーニングを導入する意図である。

(市川伸一(2016)「目指すべきアクティブ・ラーニングとは」『初等教育資料』93号, 20-23)

22

●「ディープ・アクティブラーニング」とは？

=生徒・学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、自分のこれまでの知識や経験と結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習

● 学びの三位一体論 (佐藤, 1995)

- 学びとは、
学習者と対象世界との関係、
学習者と他者との関係、
学習者と彼/彼女自身(自己)との関係、
という3つの関係を編み直すこと



23

● 3つの学びとディープ・アクティブラーニング


- 習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせながら、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」
対象世界との関係
- 子供同士の協働、教員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」
他者との関係
- 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」
自己との関係

◎ディープ・アクティブラーニングでは、「深い学び」を主軸に、「対話的な学び」や「主体的な学び」の実現もめざす

24


ディープ・ラーニングをめぐる最近の動向

- 全米研究評議会 (National Research Council, 2012; Bellanca, 2015)
 - 深化する学習 (deeper learning)

「深化する学習のプロダクトは、転移する知識であり、それは、ある領域における内容知識と、質問に答え、問題を解決するために、この知識を、いかに・なぜ・いつ適用するかについての知識とを含んでいる。この知識とスキルの混合物のことをわれわれは「21世紀型コンピテンシー」と呼ぶのである。このコンピテンシーは、個々別々の表層的な事実や手続きというよりはむしろ、内容領域についての根本的な原理やその関係性を中心に構造化されている。」(NRC, 2012, p.6)
- cf. deep(-er) learningの国際的ネットワーク
 

25

ディープ・アクティブラーニングのデザイン



26

「深い学び」に必要なもの① —深い理解—

- 「深い学び」(「審議のまとめ」2016.8.1)
 - 習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせながら、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」
- 「深い理解」の必要性
 - 「学習者が探究能力を発達させるためには、幅広い知識を身につけるだけではなく、深い理解を伴った学習が必要である…深く理解されれば、事実についての知識が応用可能な柔軟な知識に変換される」(プランسفورد他, 2002)

探究や活用のためには深い理解が必要

27

「深い理解」とは

【単元】第二次世界大戦(アメリカ史)

事实的知識 (例) ・ヒトラーの台頭	個別のスキル (例) ・年表の作成
転移可能な概念 (例) ・戦争における手段と目的(e.g. 原爆)	複雑なプロセス (例) ・歴史的な探究
原理と一般化 (例) ・戦争の中には「正義」戦争とみなされるものがある	

永続的理解
←本質的な問い
←核となる課題


深さの軸

(McTighe & Wiggins, 2004)

28

【単元】速さ

き
は×じ



事实的知識 (例) ・速さ=距離÷時間	個別のスキル (例) ・公式を使って速さを求める
転移可能な概念 (例) ・内包量の概念(速さ、密度など)	複雑なプロセス (例) ・2つの量から1つの量を求める
原理と一般化 (例) ・数値は数値、単位は単位で計算できる(40 km/h × 3 h = 120 km) ・すべての物理量は、7つの基本単位か、それらから構成される組立単位で表される	

29

「深い理解」の特徴

- ①シナジー的思考
 - 事実だけでも概念・原理だけでなく、両者の間を上ったり下ったりしながら結びつけることが、深い理解には必要である
- ②知識とスキルの転移
 - 知識は概念や一般化・原理のようなレベルでのみ転移する
- ③意味の社会的構成(協働性)
 - このような思考は学習者にとってチャレンジングな課題だからこそ、協働性が必要になる。

(Erickson, 2012)

30

「深い学び」に必要なもの② 一仮説形成と検証

- ディープ・ラーニングの特徴(再) (Entwistle, 2009)
 - 概念を既存の知識や経験に関連づける
 - 共通するパターンや根底にある原理を探す
 - 証拠をチェックし、結論と関係づける
 - 論理と議論を、周到かつ批判的に吟味する

31

～秋田大学教育文化学部附属中学校の実践から～ 【例1】社会科「世界の諸地域 アジア州」(中1)

- 本質的な問い
 - 「(インドは)どのように経済発展してきたのか？」
 - +「経済発展は(インドの)人々に何をもたらしたか？」
- 単元全体での「深い理解」
 - 中国
 - インド
 - 東南アジア諸国
 - 韓国・台湾
 - 西アジア・中央アジア

経済発展の要因と影響A

A' A'' A'''

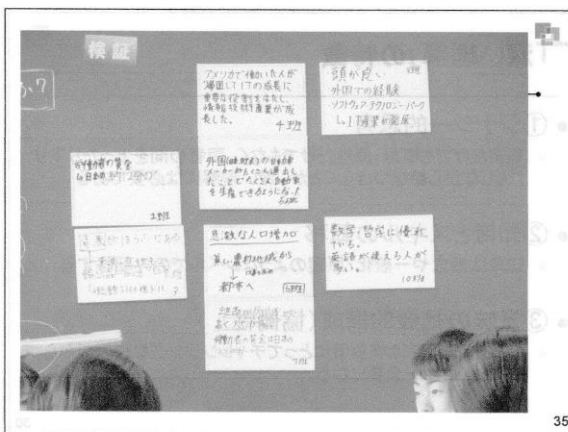
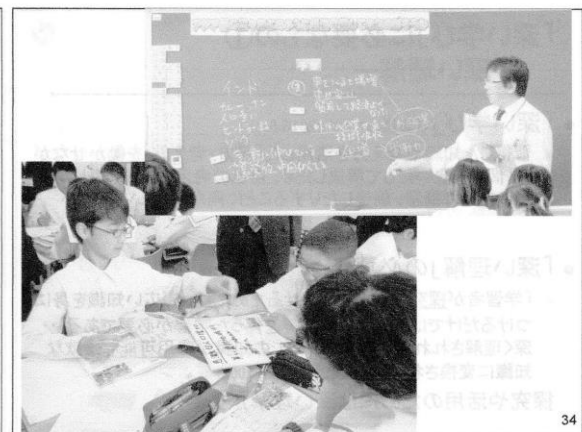
◎事例を通して理解が深まっていく

32

授業での「仮説形成と検証」

- インドはどのように(なぜ)経済発展してきたのか？

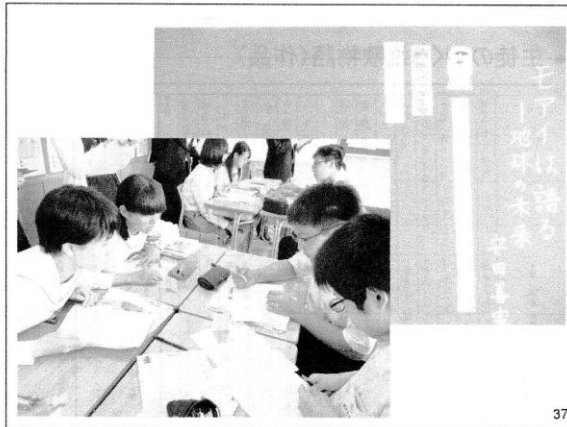
33



【例2】国語科「モアイは語る～地球の未来」(中2)

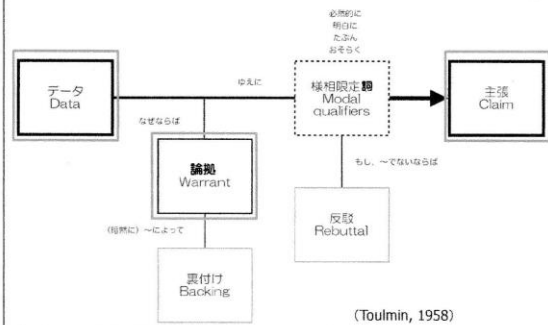
- 本質的な問い
 - 筆者の仮説は正しいと言えるか？(本文から検証する)
 - =評価読み/批判読み(critical reading)
- 授業での「仮説形成と検証」
 - 筆者の「仮説形成と検証」自体を批判的に吟味

36



37

論証のためのトゥールミン・モデル —教科横断的な思考スキルの土台—



38

「深い学び」と協働性

●なぜ、「深い学び」にとって協働性が必要なのか？

- 多くの「事実・データ」を挙げる
- 既知知識や経験を活用しながら、多様な「論拠」を考える
- 「事実・データ」と「論拠」から複数の「仮説」を考え出し、練り上げる
- 多角的に検証する

こうして作られる知は、「納得解」「最適解」になる
＝知を社会的に構成する

39

ディープ・アクティブラーニングの 実践例

40

高校古典の授業から

● 高校古典「八頭物語～和歌から歌物語へ～」(2016年)

- 鳥取県立八頭高校、荻原伸教諭
- ねらい
 - 平安時代の文章は和歌の力によって綴られているという文学研究の成果にもとづいて既習の「伊勢物語」を教材にし、「古今和歌集」の和歌から発想を膨らませて「歌物語」を書くという平安文学の作者を追体験することを試みる
- 単元計画
 - 第1時 「伊勢物語」と「古今和歌集」の詞書きを比較分析する
 - 第2時 与えられた和歌についての歌物語を創作する

八頭物語

41

● 学習活動の流れ

- ① 「伊勢物語」第5段と「古今和歌集」632の歌を比較し、分析する。
- ② 一人一人が自分に与えられた和歌（「古今和歌集」より）を解釈する。（10首）
- ③ 和歌に映し出された「人間関係」「場所・状況」「物語と和歌をむすびつけるアイテム（固有名詞など）」を取りだす。
- ④ ③をもとにして歌物語をつくる。
- ⑤ できあがった自分の歌物語を、他のメンバーに開示し共有する。
- ⑥ 自分の解釈と友達との解釈、専門家の解釈の違いを読み味わう。

【集団編成】

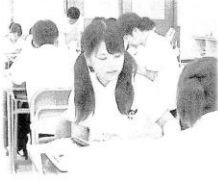
- 個人→班(4人)→クラス
- 個人(班内は全員別の歌)
- 個人
- 個人
- 個人
↔班
↔同じ歌を担当する仲間
- 個人↔クラス・専門家

42

● この単元での知の構造

【単元】八頭物語

事実に知識	個別的技能
(例) ・古文の単語や文法の知識	(例) ・古語辞典を使って単語の意味を理解する
転移可能な概念	複雑なプロセス
(例) ・寄物陳思の構造	(例) ・和歌の解釈をつくる ・現代文を古文に翻訳する
原理と一般化	
(例) ・平安時代の文章は和歌の力によって綴られている ・作品は、読者とコンテキストとの関係の中に成立する(「作者の死」) ・物語とは断片的な断片と断片に脈絡をつけて整序すること	



● 生徒のつくった歌物語(作品)

【例】

思ひ出さし 恋しき心はあはれしき山より月をみてこそ月
 我懐しては恋心も都々何れもなまなまは月影の光
 ようた 寄物 藤原 隆久 月影の光をよみては恋心も
 思ひ出さし 恋しき心はあはれしき山より月をみてこそ月
 我懐しては恋心も都々何れもなまなまは月影の光
 ようた 寄物 藤原 隆久 月影の光をよみては恋心も

【例】

思ひ出さし 恋しき心はあはれしき山より月をみてこそ月
 我懐しては恋心も都々何れもなまなまは月影の光
 ようた 寄物 藤原 隆久 月影の光をよみては恋心も

● 生徒たちの感想

- 「自分で物語りをつくるということが新鮮で、楽しく和歌を学ぶことができました。同じ和歌でも人によって解釈のイメージは違い、それを共有して理解することができた」
- 「歌だけを手がかりにして情景に思いを馳せ想像力を膨らませた。物語をつくることによってその和歌にはまっていく感じを味わうことができました」
- 「古語を現代語に訳すのはテストなどでさんざんやったからある程度自信があったけど、物語をつかって、それを古文にするのは初めてだったので、自分に単語力が足りてないことや、文法がうろ覚えであることなどに気づけてよかったです。和歌の訳を頑張りました」
- 「歌をつなげることで物語が生まれるのだと実感できました」

● 教師の授業観(「八頭物語」あとがきより)

- 「和歌と対話し、他者と対話し、これまでやこれからのじぶんじしんと対話しながら、深い読みや深い学びは、今回のようにまれる／みんなであみだすものなのだと私は思います。」

まとめ

- 社会の変化に対して新しい「資質・能力」が求められるようになった。(その具体化である「学力の3要素」の中身には少しずつ修正が加えられている。)
- アクティブ・ラーニングは、そうした資質・能力を育成するための方法として提案されている。
- アクティブ・ラーニングは「主体的・対話的で深い学び」と言い換えられつつあるが、それには「ディープ・アクティブラーニング」論も影響を与えた。
- 資質・能力の中身にも、学習指導の方法にも、時代性と普遍性がある。ディープ・アクティブラーニングの土台は日本の教育実践の中にすでに存在する。その土台の上に、新しい実践を築いていくことが求められる。

文献

- ブラスフォード, B., ブラウン, A., クッキング, R. 編 (2002). 『授業を変える—認知心理学のさらなる挑戦—』(森敏昭・秋田喜代美監訳) 北大路書房。
- Entwistle, N. (2009). *Teaching for understanding at university: Deep approaches and distinctive ways of thinking*. New York: Palgrave Macmillan.
- N. エントウイスル(2010)『学生の理解を重視する大学授業』(山口栄一訳) 玉川大学出版部。
- Erickson, H. L. (2012). *Concept-based teaching and learning*. International Baccalaureate Organization.
- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2015). 『ディープ・アクティブラーニング—大学授業を深化させるために—』勁草書房。
- McTighe, J., & Wiggins, G. (2004). *Understanding by design: Professional development workbook*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development.
- National Research Council (2012). *Education for life and work: Developing transferable knowledge and skills in the 21st Century*. Washington, DC: The National Academies Press.

- 佐藤学 (1995). 『学びの対話的実践へ』(佐伯胖・藤田英典・佐藤学(編))『学びへの誘い(シリーズ 学びと文化①)』東京大学出版会。
- Toulmin, S. E. (1958). *The uses of argument*. Cambridge University Press.
- トウルミン, S. (2011). 『議論の技法—トウルミンモデルの原点—』(戸田山和久・福澤一吉訳) 東京図書。
- Wiggins, G. & McTighe, J. (2005). *Understanding by design, Expanded 2nd ed.* ASCD. ウィギンズ, G. & マクタイ, J. (2012). 『理解をもたらしカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』(西岡加恵訳) 日本標準。

□■□研究室だより□■□

岡山大学大学院教育学研究科 河田哲典

岡山大学教育学部は、平成 12 年より教員の養成・研修及び学校教育上の諸課題に対応し、岡山県の教育の充実・発展を図るため、岡山県並びに岡山市教育委員会との連携協力事業を進めています。家政教育講座においても、この連携協力事業の一環として、毎年 8 月に小・中・高等学校の先生方の家庭科の授業実践に寄与できる内容等の提供を目的とした研修講座を開催してきました。本講座は平成 28 年度で 14 回目となりますが、日本家庭科教育学会第 57 回全国大会の公開講演会・シンポジウム、2 回の家庭科教育学会中国地区会との共催もあり、家庭科教育研究を推進し、家庭科教育を通して社会に貢献する家庭科教育学会の活動と深く関わってきました。14 回の講座を表に示しました。

年	主題テーマと内容
平成 15 年	新しい家庭科を求めて -家庭科の意義と授業を考える- /家庭科と総合的な学習の時間、家庭科と環境教育、家庭科と健康教育/調理学習を考える、住居学習を考える、学習法を考える
16 年	新しい家庭科を求めて -小・中・高をつなぐ食物教育-
17 年	新しい家庭科授業の探究 新しい家庭科授業の提案
18 年	新しい家庭科授業の探究 新しい授業実践を考究する
19 年	新しい家庭科を求めて -家庭科教育の使命を考える- /第 27 回家庭科教育学会中国地区会との共催
20 年	新しい家庭科授業の探究 -科学・学問を基盤とした授業構成をめざして-
21 年	新学習指導要領家庭科授業への提案 -科学・学問を基盤とした授業構成をめざして-
22 年	新学習指導要領家庭科授業への提案 -中国地区 5 県の家庭科実践研究を中心として- 第 29 回家庭科教育学会中国地区会との共催
23 年	小・中・高等学校の家庭科の系統性を考える -小・中・高等学校の食品群を視点として-
24 年	食文化の伝承 -家庭科教育に期待するもの-
25 年	家庭科と特別支援教育
26 年	いま進んでいる教育改革と家庭科/第 57 回日本家庭科教育学会公開講演会、シンポジウム
27 年	家庭科と食文化を考える -植物性食品-
28 年	欧州における家庭科教育/日本教育大学協会中国地区会家庭科部門との共催

この間、平成 17 年には、岡山県小・中・高等学校家庭科教員のこの講座に対する希望を調査し、現在の家庭科の問題点を考察した報告を行っています¹⁾。

平成 28 年度は、これまで取り上げたことのなかった諸外国の家庭科とわが国の家庭科との比較・検討をテーマとする講演会と参加された先生方との交流会を開催しました。講演会では、大学院教育学研究科栗坂祐子特任教授によりドイツ、スイスの学校等の多くの映像や資料を用い、わが国の家庭科と比較しながらカリキュラム・授業・施設設備等の報告がなされました。また、交流会では、様々な校種で家庭科を担当している先生方で活発な意見交換がなされ、同じ立場の教員同士で意見交換ができたことが有意義であること、新指導要領を見据えた今後の家庭科教育の在り方や、科学的な思考力や物の見方を育てていくための授業構成等の研修をしたいという意見がだされました。

今後、学校教育における家庭科の意義や重要性を示す教育実践の創造と、その推進力となる“全校種にわたる家庭科担当者を結びつけ、悩みや実践を共有し、子どもにとって意味のある授業実践を積み重ねていくことのできるネットワーク”の構築に繋がる講座にしたいと考えています²⁾。

1) 佐藤・河田・笠井・杉原 (2005) : 小・中・高等学校家庭科教員のレカレント教育に関する一考察 -「夏期講座」開設に対する岡山県教員の希望調査を中心として-。日本家庭科教育学会誌, 48, 133-140.

2) 佐藤(2016)：欧州における家庭科教育．“平成 28 年度連携協力事業研究報告書”，pp19-20（岡山大学大学院
教育学研究科・教育学部・教師教育開発センター）



<学校現場から>

生活の中の課題を主体的に捉えさせる家庭科

鳥取市立湖東中学校 西垣 充子

1. はじめに

中学校家庭科の「衣生活・住生活の自立」の学習では、住居の基本的な機能について知り、家族の安全を考えた室内環境の整え方と、快適な住まい方を工夫できることを指導するとあります。住まいは私たちを自然から保護し、心身の健康と安らぎを与える場所ではありますが、ここ近年、自然災害は様々な地域で発生しています。だからこそ、日頃から災害に備える必要性があることは誰もが分かっています。学習前には、住生活学習事前アンケートを取り、生徒の実態を把握するのですが、災害への備えがある生徒は3割程度と、家庭での防災意識の低さが窺えるのです。この背景として、災害を「人ごとのように感じ、自分のこととして考えられていない」、「自分のこととして取り入れたいと思っているが、何からしていいかわからない」状況があるのではないかと考えました。

そこで、「生徒にとって必要感がある災害の備えとは?」、「他人ごととは思わないで、自分のこととして考えられる」課題設定の方法を考えてみようと思いました。

2. 生活の中の課題を主体的に捉えさせる家庭科 ～非常持ち出しバッグの実践を通して～

まずは過去の災害の例を新聞や映像を使い、家庭での備えが安全に身を守る方法であることに気づかせたいと考えました。学習対象となる中学1年生は、東日本大震災当時小学校低学年だったこともあり、災害の記憶は曖昧でした。当時の映像や新聞記事にたくさん目を通し、災害は人々の生活を脅かす存在になることを認識できたようです。また、備えをした場合と備えをしていない家庭内とを比較し、備えは、被害を最小限にする方法であることを確認しました。だからこそ自分の生活を見直し、自分のこととして自らの課題を設定しようとする生徒が多く出てきました。生徒の意見としては、「家具類の転倒防止対策」、「家族間で非常時の連絡先や集合場所を話し合う」、「避難訓練をする」、「寝る場所の近くには大きな家具を置かない」、「非常持ち出しバッグの準備」など、災害時の状況から効果的だと考えられる対策を発表していきました。その中でも、非常持ち出しバッグの備えの必要性を実感したようです。避難所での生活の様子が書かれた写真や記事から、非常持ち出しバッグがあれば、様々な不便や生活の困難さに対応でき、少しでも潤いのある生活になるのではないかとこの発想からでした。その後、市販の防災バッグを参考に、自分の家族に必要な一次持ち出し品を考える活動を取り入れました。その過程で、非常持ち出しバッグは、「住まいと同じ働きをするかも」・「一時をしのぐためにも必要なものを入れなくては」・「必要なものはたくさんあるけど、走ると荷物が重い」・「中

<学校現場から>**

小学校家庭科で育みたい資質・能力と主体的・対話的で深い学びを探る

島根大学教育学部附属小学校 竹吉昭人

1. はじめに

先日、平成32年度新学習指導要領実施に向けて、学習指導要領案が出されました。各教科で育成すべき資質・能力について「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう人間性」を柱として、家庭科でも具体的に示されたところです。本校では、今年度の授業研究の中で、この3本の柱を基に子どもたちに備えさせたい資質・能力として以下のように設定し、実践をしてきました。

- ① よりよい生活や社会を創造するために必要な知識や技能を身に付ける力
- ② 課題を多面的にとらえ、身に付けた知識や技能を場面に応じて活用する力
- ③ よりよい生活や社会を創造する力

（“社会”の言葉が入っているのは、附属中学校技術・家庭科と学校園として研究を進めているためです）

特に②課題を多面的にとらえ、身に付けた知識や技能を場面に応じて活用する力に焦点を当てて取り組みました。これは、学習指導要領案の家庭科の目標の中にある「生活の営みに係わる見方・考え方」と通じるものが多く、これからの家庭科学習の中で大切な視点になると考えます。

2. 今年度の実践から

○題材名 自分の生活にピッタリ！手作り整とんグッズで快適に過ごそう（6年生）

○題材のねらい 自分の生活をふり返り、生活の課題に応じた手作り整とんグッズを作ることで、整理整頓の仕方の工夫を見いだしたり、主体的に身の回りを快適に整えたりしようとする態度を育む。

上記のねらいで題材を構成し、授業を行いました。資質・能力を育成し、主体的・対話的で深い学びになるために次の2点を大切にしました。

○主体的な追求をするための土台作り

～生活を見つめ直し、日常生活の中から「課題」「願い」「問い」を見いだしていく～

まず、日々の自分自身の生活の中から、整理整頓に対する「課題」をしっかりと引き出しました。具体的にどの場面でどのような物に対して整理整頓の課題があるのか、どのようなグッズがあると生活がより快適になるかなど、個人、小グループ、学級全体で考える場を設定しながら明らかにしました。「自分の机の上の文房具を整理するためにペン立てを作りたい！」などという「願い」を一人一人がもち、どうしたら便利なグッズが作れるか「問い」をもつことができ、整理整頓に対する追求の土台となりました。

○多面的な見方・考え方の視点を明確にする

グッズの製作に当たっては、まず、その形や大きさについて考えることが第一の課題となります。実際に整理整頓したい物を持って来たり、その大きさを測ってきたりすること、実際に使う場所や場面も考慮しながら考えたり、試し作りをしたりしながら考えました。製作の素材は、紙を用いました。完成に向けての多面的な視点として、素材と丈夫さの関係に着目しました。身の周りにお菓子などの空箱の作り方や丈夫さなどを観察し、紙の厚みやのりしろについてのポイントを見いだしました。自分の目的に合わせて丈夫さを考慮しながら紙の厚さを選び、紙の厚さと加工のしやすさの関係や、接着部分に工夫することで丈夫さが変わることなどの気付きを整理しながら、製作につなげていきました。

3. 主体的・対話的で深い学びを目指して

家庭科の特に実習を中心とした学習では、製作や調理の魅力からそれだけで子どもたちは“意欲的”に取り組めます。しかし、その姿と主体的な姿はイコールではありません。意欲が主体に変わるためには、そこに一人一人が課題を見だし、願いや問いをもつことが重要です。また、グループや学級での話し合いも、ただ意見を出し合うだけでは不十分です。多面的な視

点で考え、話し合うことで、自分にはなかった考えを獲得したり、また、よりよいもの、最適なものを練り上げたりすることができる、それを自覚できる学習が深い学びではないかと考えます。これからも授業実践を通して探っていきたいと思います。

2016年度 日本家庭科教育学会本部だより

2016（平成28）年12月11日（日）に、東京家政大学板橋キャンパスにおいて「家庭科教育学会

2016（平成28）年度例会」が開催され、例会終了後に「2016年度第2回地区会代表者会議」がありました。協議事項並びに報告事項を以下に記します。

1. 各地区会の共同研究の進め方など地区会の活動について

中国地区：8月末に鳥取大学で総会・研究発表会・シンポジウムを開催したこと、1月末の締切で共同研究を進めていること、報告書出版予定、3月末に会報を出版する旨報告した。

2. 全国大会開催の輪番について

2017年度：理事会（60周年）、2018年度：関東地区、2019年度：東海地区、2020年度：北海道地区、2021年度：近畿地区（2007年度第4回理事会承認 2007年度第2回地区会代表者会議報告了承済）

3. 地区会代表者会議の運営について

2016年度：東北地区、**2017年度：中国地区**、2018年度：四国地区、2019年度：北陸地区、2020年度：関東地区、2021年度：東海地区（2013年度第2回地区会代表者会議覚書より）

4. 全国会員名簿の提供について

全国会員名簿の電子データは個人情報であることからかなり以前から提供できない状態である。確認したい場合は、被選挙人名簿を利用して欲しい。また、地区交付金は全国会員の人数に対応する地区への助成（人への助成ではなく）であることが確認された。

5. 2017年度の60周年記念行事（6月24・25日、於：国立オリンピック記念青少年総合センター）について

24日：総会、記念式典、講演（講演者 勝間和代氏） 記念パーティー

25日：シンポジウム（基調講演 安彦忠彦氏）※前日の6月23日に、理事会、地区会代表者会議を開催

6. 課題研究について

本日（12/11）が最終報告会であり、12月（一部3月）の会計報告をもって終了となる。最終報告文は、例会要旨集の後半に収録するとともに学会HPに掲載予定である。

7. 今年度セミナーの開催（2017年3月26日 キャンパスイ・ノベーションセンター東京）について

講師 西岡加奈恵氏

演題 「パフォーマンス評価の考え方と進め方—パフォーマンス課題づくりを中心に—」

8. 「家庭科未来プロジェクト」（研究推進・事業の合同）について

2017年3月までに基礎的な結果分析を終了。60周年記念大会でポスター発表。2017年例会で報告、書籍として出版の予定。

9. 日本家庭科教育学会60周年記念誌について

・各地区に執筆についての依頼があった。

・50周年記念誌と比べて60周年記念誌の論文数が少ない状況である。今後、投稿論文数を増やしていただきたいとの依頼があった。

10. 学会ホームページについて

・ホームページの更新の際は、事務局宛に情報を連絡する。

・WEBページのトップページに子どもたちの学びの様子を紹介したいと考えているため、写真提供の依頼があった。写真提供の際は署名・捺印の上、事務局宛にデジタルデータ送信のこと。

・毎月25日にメール配信されている「メルマガ」に地区会の勉強会等の情報を載せる場合は、毎月15日締切である。 (西敦子)

第 37 回 研究発表会・講演会・総会のご案内

講 演

「資質・能力ベースのカリキュラム改革と 教科学習の課題」



講師 石井英真氏

(京都大学大学院教育学研究科 准教授)

【主なご著書】

『増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂（2015）、『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準（2015）、『中教審「答申」を読み解く』日本標準（2017）、『小学校発 アクティブ・ラーニングを超える授業—質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業』日本標準（2017）、『教師の資質・能力を高める！ アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師へ』日本標準（2017）、『新しい教育評価入門—人を育てる評価のために』有斐閣（2015）、『[Round Study] 教師の学びをアクティブにする授業研究—授業力を磨く！ アクティブ・ラーニング研修法』東洋館（2017）など。

期日 2017年8月26日(土)

- 総会 13:00~13:30
- 研究発表 13:40~14:40
- 講演 15:00~16:30
- 閉会 16:30

会場 学校法人福山大学 宮地茂記念館 402室

*研究発表の申込みは、同封の申込用紙にてお願いいたします。尚、プログラムや講演等の詳細については、研究発表の申し込み締め切り後に発送いたします。

事務局だより

<新入会員> (敬称略)

(山口県) 町田万里子, 河村尚代, (鳥取県) 西垣充子
(島根県) 小川詩織, 藤原沙季, 名和川祐佳, 道中汐梨, 桐原加奈
(岡山県) 李環媛, XU ZHENNI, (京都府) 上野正恵

<退会会員> (敬称略)

(山口県) 入江和夫, (広島県) 田中由美子, (岡山県) 三宅元子

1. 会報執筆について

	(学校現場より)	(研究室だより)
37号(平成28年度)	鳥取	島根
38号(平成29年度)	島根	岡山
39号(平成30年度)	岡山	広島
40号(平成31年度)	広島	山口
41号(平成32年度)	山口	鳥取

2. 地区会費の納入のお願い

地区会費の納入状況についてのお知らせを同封しています。2017年度の地区会費とともに未納分の地区会費を下記の口座に納入して下さいますよう、お願いいたします。

未納期間が4年を超えますと、自動退会となりますので、ご注意ください。

お知らせの入っていない方は、2017年度まで地区会費が納入済です。

【地区会費】

銀行口座	トマト銀行 野田支店 普通預金
振替口座番号	1660032
加入者名	日本家庭科教育学会中国地区会
年会費	1,000円
入会金	不要

【入会申し込み方法】

下記事務局までお問い合わせ下さい。

3. 事務局連絡先

住所・勤務先の変更などがございましたら、事務局までお知らせ下さい。

〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1 岡山大学教育学部

TEL : (086) 251-7675 E-mail : sw20@okayama-u.ac.jp

《編集後記》

会報第37号をお届けいたします。会報の発行に当たりまして、年度末のお忙しい中、ご執筆くださいました先生方に深く感謝申し上げます。会員の皆様には会費納入のご協力をお願いします。また、氏名や連絡先の変更が生じた場合は、事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。ご協力よろしくお願ひいたします。8月の中国地区会では、多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。
(篠原陽子)

日本家庭科教育学会中国地区会会員 各位

学会事務局

第 37 回 研究発表会・講演会・総会のご案内

会報に記載されておりますように、2017年8月26日(土)、学校法人福山大学 宮地茂記念館におきまして、標記の会を開催いたします。

つきましては、研究発表を希望される方は、研究発表申込書(切り取り線以下)に、必要事項をご記入の上、5月31日(水)までに下記までお送りください。

【送付先】〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸 117-1

福山平成大学福祉健康学部 中村喜久江

(TEL : 084-972-5011 (2853), E-mail : n-kikue@heisei-u.ac.jp)

***** 切り取り線 *****

発表者・所属 (演者には○印)		
発表題目		
パワーポイント 使用の有無 (○で囲む)	使用する	・ 使用しない
発表者の連絡先	電話番号	メールアドレス